

尼崎市

塚口山廻遺跡

— 都市計画道路事業（園田西武庫線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和2（2020）年3月

兵庫県教育委員会

尼崎市

塚口山廻遺跡

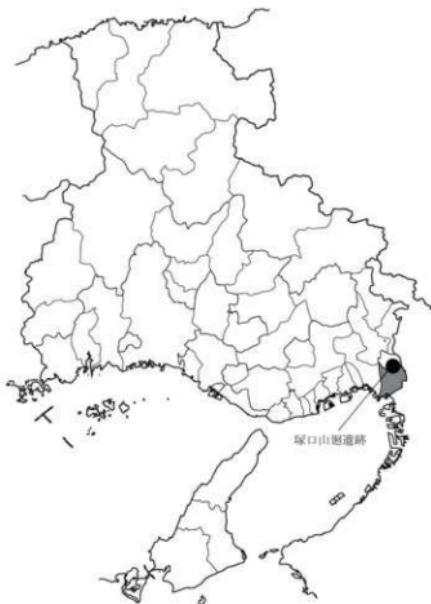
— 都市計画道路事業（園田西武庫線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和2（2020）年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は尼崎市塚口本町6丁目に所在する塚口山廻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、兵庫県阪神南県民局（当時）西宮土木事務所が計画する都市計画道路事業（園田西武庫線）に伴うものである。
3. 確認調査は平成24年度、本発掘調査は平成28・29年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県立考古博物館が調査を担当した。
4. 平成24年度の確認調査は多賀茂治が担当した。平成28年度の本発掘調査は村上泰樹、平成29年度の本発掘調査は中川涉・上田健太郎が担当した。
5. 調査で使用した方位は、座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
6. 遺物出土状態や土層断面図などの遺構図は調査員が実測した。
7. 遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真は国際文化財株式会社に委託し、撮影した。
8. 整理作業は、令和元年度に兵庫県立考古博物館において公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が担当した。
9. 本書の執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部の中川涉と大嶋昭海が担当し、編集は大嶋が行った。
10. 本調査において出土した遺物や作成した写真図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
11. 発掘調査・整理作業にあたり、尼崎市教育委員会をはじめ地元関係者・機関のご協力・ご教示を得ました。感謝致します。



本文目次

第1章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境.....	1
第2節 歴史的環境（古墳時代・弥生時代）.....	1

第2章 調査の経過

第1節 確認調査	4
第2節 平成26年度の本発掘調査.....	5
第3節 平成28・29年度の本発掘調査	5
第4節 出土品整理・報告書作成作業	5

第3章 調査の成果

第1節 調査成果の概要	7
第2節 基本土層（図版2）	7
第3節 掘立柱建物	7
第4節 土坑・柱穴	9
第5節 溝状遺構	10

第4章 まとめ

第1節 調査のまとめ	13
------------------	----

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 調査区位置図	6
第3図 時期別遺構配置図	13

表目次

第1表 遺跡地名表	2
第2表 調査一覧	4
第3表 掘立柱建物一覧	11
第4表 土器観察表	12

図版目次

図版1 遺構配置図	図版7 堀立柱建物SB5
図版2 土層断面図	図版8 堀立柱建物SB6・土坑SK1・土坑SK2
図版3 堀立柱建物SB1	図版9 溝状遺構配置図・溝状遺構断面図
図版4 堀立柱建物SB2	図版10 出土遺物I
図版5 堀立柱建物SB3	図版11 出土遺物II
図版6 堀立柱建物SB4	

写真図版目次

写真図版1 H28調査区全景(西から)	写真図版7 堀立柱建物SB5検出状況(南東から)
H28調査区全景(北から)	SB5-P1土層断面(南から)
写真図版2 H29-2調査区の立地(西から)	SB5-P2土層断面(南から)
H29-2調査区全景西半部(西から)	SB5-P3土層断面(南から)
H29-2調査区全景東半部(西から)	SB5-P4土層断面(南から)
写真図版3 H29-1調査区西側全景(西から)	写真図版8 溝状遺構SD1遺物出土状況(西から)
H29-1調査区東側全景(北から)	SD1遺物出土状況(北西から)
H28調査区北壁(南から)	SD1完掘状況全景(北東から)
H28調査区北壁近景(南から)	写真図版9 溝状遺構SD1完掘状況(東から)
H28調査区西側柱穴群全景(北から)	SD1土層断面a-a'(北東から)
写真図版4 H28調査区東側柱穴群全景(北から)	SD1土層断面b-b'(北から)
H29-1調査区東側柱穴群(北から)	写真図版10 溝状遺構SD2完掘状況全景(北東から)
H29-2調査区東側柱穴群(南から)	溝状遺構SD3完掘状況全景(南西から)
写真図版5 堀立柱建物SB1全景(北から)	SD3土層断面(北から)
SB1-P6土層断面(北から)	写真図版11 出土遺物I
SB1-P4土層断面(北から)	写真図版12 出土遺物II
SB1-P10土層断面(西から)	写真図版13 出土遺物III
SB1-P11土層断面(東から)	写真図版14 出土遺物IV
写真図版6 堀立柱建物SB2全景(北西から)	
SB2-P5断ち割り状況(西から)	
堀立柱建物SB3全景(北から)	
SB3-P1検出状況(北から)	
SB3-P1土層断面(北東から)	
SB3-P1完掘状況(南から)	
堀立柱建物SB6-P5断ち割り状況(南から)	
土坑SK2検出状況(北西から)	

第1章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

尼崎市は兵庫県の南東隅に位置し、東側は猪名川・神崎川などを挟んで大阪市や豊中市と、西側は武庫川を挟んで西宮市と境界を接している。北側は伊丹市と接しているが、その境界線は複雑に入り組んでおり、また住宅地としての開発も個別に進められたため、現地を歩いても市境は判然としない。

尼崎市域はかつて東半部が川辺郡、西半部が武庫郡の一一部であり、遺跡が所在する塚口本町は、市への合併前は川辺郡立花村であった。現在も同市の立花地区の一角ではあるものの、感覚的には、最寄りのターミナルである阪急電鉄塚口駅を中心とした地域というイメージに包摂される。

同市域の地質は、中央から南半部を猪名川・武庫川が形成した冲積平野に占められ、海岸部は埋め立てが進行している。一方、北部には伊丹段丘が伸びてきていて洪積台地が地表に現れている。条理型地割りが発達した平野部と、溜池や畠地、荒蕪地の多い段丘とは、土地利用が歴然としていた。そのため明治期以降、段丘上は工場の用地などに供されることも多く、現代にも引き継がれている。

第2節 歴史的環境（古墳時代・弥生時代）

尼崎市御園・塚口本町から伊丹市柏木町・御願塚にかけての伊丹段丘縁辺部には、かつて 20 基以上の古墳からなる猪名野古墳群が存在したといわれているが、原状をとどめているものは非常に少ない。その中の御願塚古墳（第1図 55 以下、同）は、墳頂に社が祀られていたこともあるって、明確に墳丘を残している。全長 52m の帆立貝形古墳で、二重の周濠を有している。出土した埴輪から 5 世紀後半の築造と考えられる。御願塚古墳の約 720m 南方に位置する柏木古墳（50）は、住宅地の中に墓地として円丘状のマウンドが遺存している。平成 7 年の調査で周濠が見つかり、墳丘は約 55m の直径をもつことが明らかとなつたが、前方部の有無は分かっていない。出土した埴輪から御願塚古墳よりも先行する 5 世紀中葉に位置づけられる。

御願塚古墳の約 1km 東方に位置する大塚山古墳（9）は、昭和 12 ~ 13 年に土採りによって破壊され、その際に京都大学考古学教室による調査が行われた。全長 42m の前方後円墳で、採土中に出土した遺物や木片からみて、後円部に粘土桿の木棺があったと考えられる。副葬品には五鈴鏡、鉄刀、玉類などがある。これとは別に後円部に見つかった土壙からは、鉄刀・刀子・鉄槍・鐵織などの武器類、鐵鏟・鐵斧・鐵鎌などの工具類、金銅製の鞍・杏葉・雲珠および鏡・轡などの馬具が出土した。その後、昭和 45 年の中ノ田遺跡（10）の発掘調査で周濠の存在も明らかとなり、人物・蓋形の形象埴輪の破片も出土した。6 世紀前半～中葉の年代が与えられる。

大塚山古墳の約 150m 南方の南清水古墳（8）は、素盞鳴神社境内にある全長 46m の帆立貝形古墳で、周濠の痕跡が認められる。採集された土器・埴輪片から 6 世紀中頃のものとみられる。また園田大塚山古墳から約 600m 北西の南本町遺跡（58）では 6 世紀初頭の古墳の周溝が見つかっており、埴輪片も出土している。伊丹台地では有岡城跡・伊丹郷町遺跡や塚口城跡（3）でも埴輪片が出土しており、削平された埋没古墳は段丘上に相当数あるものとみられる。

御園古墳（4）は現在、三菱電機伊丹製作所の敷地に取り込まれたような墓地に残骸が遺存している。



第1図 周辺の遺跡

第1表 遺跡地名表

No.	道路の名称	道路の所在地	時代	No.	道路の名称	道路の所在地	時代	No.	道路の名称	道路の所在地	時代
尼崎市				21	四ノ宮道路	田能	弥生～平安	42	若王寺遺跡	若王寺	弥生～古墳
1	塚口山製造路	塚口本町	弥生～中世	22	食満1号墳	食満	古墳	43	二ノ宮道路	若王寺	弥生～古墳
2	池田山古墳	塚口本町	古墳	23	食満2号墳	食満	古墳	44	川崎遺跡	久々知	弥生
3	塚口城跡	塚口本町	中世	24	西ノ口道路	食満	古墳	45	堺城／南道跡1	久々知	古墳
4	阿園古墳	塚口本町	古墳	25	森復古道跡	食満	弥生	46	堺城／南道跡2	久々知	弥生～古墳
5	阿園の石柱	御園	古墳	26	南ノ口道路	食満	弥生～古墳	47	海老宇盧路	南堀口町	古墳
6	稻荷遺跡	南清水	古墳	27	鍛田道路	食満	古墳	48	ノ野道跡	南堀口町	古墳
7	松ヶ内道路	南清水	弥生～奈良	28	藤川(米道跡)	食満	圓文～古墳	49	裏山・下川道跡	南堀口町、尼崎市	弥生～中世
8	南清水古墳	南清水	古墳	29	宮ノ森道路	食満	古墳～中世	50	伊丹市		
9	大堀山古墳	南清水	古墳	30	東口道路	食満	古墳	51	柏木古墳	柏木町	古墳
10	中ノ田道路	南清水、膳名寺	弥生～奈良	31	古吉道跡	食満	弥生～古墳	52	御園遺跡跡地	御園駅	奈良～平安
11	南須道路	膳名寺	弥生～奈良	32	南須道路	食満	弥生～古墳	53	御園遺跡跡地	御園駅	奈良～平安
12	寺前道路	膳名寺	弥生～古墳	33	通田道路	反対	古墳	54	御園遺跡跡地	稻野	奈良～平安
13	真淨坊道路	膳名寺	弥生～古墳	34	無野神社遺跡	若王寺	弥生～中世	55	御園廻古墳	古墳	奈良～平安
14	膳名寺陥落路	膳名寺	奈良～中世	35	平田道路	若王寺	古墳	56	南町遺跡	南町	古墳～中世
15	膳名寺道路	膳名寺	古墳～平安	36	田能	若王寺	古墳	57	平松町遺跡	平松町	奈良～平安
16	北側道路	膳名寺	弥生～古墳	37	若王寺千利處遺跡	若王寺	古墳	58	南本町遺跡	南本町	古墳～中世
17	上園道跡	田能、膳名寺	弥生	38	伊佐良神社遺跡	上坂部	古墳～中世	59	黄金環古墳	東有閑	古墳
18	春日神社道路	田能	弥生～中世	39	伊豆太古墳	下坂部、若王寺	古墳				
19	田能道路	田能	弥生	40	下川道路	若王寺	弥生～古墳				
20	田能高田道路	田能	弥生～古墳	41	奉日道路	若王寺	古墳				

もとは全長 60m ほどの前方後円墳だったようだが、封土はほとんど失われており、昭和 8 年に出土した組合式家形石棺が現地に存置されている。石棺からは鏡・玉類・剣の出土が伝えられ、直刀の刀身片とそれに伴うとみられる環頭・鞘口金具、および棺外出土の須恵器数点が現存する。埴輪の年代から築造は 5 世紀後半だが、石棺は 6 世紀中頃に追葬されたものとみられている。御園地区には他に、用水路の石橋に使われていた岡院の石棺（5）と呼ばれる割竹形石棺の蓋石が知られている。型式的には市内近辺で最古のもので、5 世紀前半の所産とみられる。

御園古墳の北西約 650m に位置する池田山古墳（2）は、大正年間の土探りで封土を失い、池となっていたが、その形状から本来は全長約 71m の前方後円墳であったと判断される。現在は三菱電機伊丹製作所の敷地内にあたり痕跡はまったく現認できないものの、平成 24 年度に兵庫県教育委員会が実施した確認調査では、古墳の周濠を見いだしている。大正元年の掘削の際には、漢式鏡・鉄刀・鐵織・土器が、同 8 年の工事では鏡 2 面・刀劍・土器が出土したと伝わるが、現存するのは内行花文鏡の断片 1 点と土師器小壺 1 点のみである。出土状況も不明確であるが、石櫛の存在をうかがわせる証言がある。前期から中期にかけての築造と考えられ、猪名野古墳群で最古・最大の古墳である。

池田山古墳の北側に隣接する同製作所の敷地内では、平成 14 年に開発に伴う試掘調査が行われ、弥生時代～古墳時代の遺跡であることが分かり、塚口山廻遺跡（1）として発掘調査された。その結果、古墳時代後期の集落跡と方墳の周溝、および弥生時代後期の集落跡が調査された。

池田山古墳からは南東へ約 1.5km 離れた下坂部地区の伊居太神社境内に存在する伊居太古墳（39）は、全長が市内最大で 92m と推定されている。これまでに部分的に行われた調査で出土した埴輪・土器片から、5 世紀末のものとみられ、かつては南西側に陪塚とみられる 2 基の円墳が残っていた。また同古墳の約 400m 東には古墳時代中期～後期の大集落である若王寺遺跡（42）があり、関係がうかがえる。

塚口山廻遺跡では弥生時代後期の遺構も見つかっているが、周辺の同時代の遺跡としては著名な田能遺跡（19）が北東約 2km に位置する。弥生時代前期～後期まで継続しており、地域を代表する拠点集落である。また南西約 1.7km には、弥生時代中期の方形周溝墓が見つかっている栗山・庄下川遺跡（49）が存在するなど、中期段階までは冲積地に大規模な集落が営まれていた。後期になると、塚口城跡（3）や大塚山古墳・猪名寺廻寺跡（14）の下層からも遺構・遺物包含層が見つかり、段丘上に集落が点在するようになることが知られる。

参考文献

- 梅原末治 1925 「川邊郡塚口池田山古墳」『兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯 兵庫縣
村川行弘 1966 「考古学からみた尼崎」『尼崎市史』第 1 卷 尼崎市役所
高井傳三郎 1971 「古墳時代の伊丹」『伊丹市史』第 1 卷 伊丹市
村川行弘 1980 「古墳時代」『尼崎市史』第 11 卷 尼崎市役所
西谷真治 1992 「IV 古墳時代」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県
柏原正民 1999 「柏木古墳第 1 次調査」『伊丹市埋蔵文化財調査報告書 震災復旧・復興事業に伴う発掘調査』伊丹市教育委員会
岡田務・高梨政大 2008 「塚口山廻遺跡」『尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成 10 年度 (2)・11・12・13・14 年度』尼崎市教育委員会
伊丹市教育委員会 2008 『御園塚古墳発掘調査報告書—第 8・9・10 次調査—』

第2章 調査の経過

第1節 確認調査

兵庫県阪神南県民局（当時）西宮土木事務所では、尼崎市塚口本町6丁目地内において、都市計画道路事業（園田西武庫線）を進めている。三菱電機伊丹製作所の敷地を貫通する事業地内には「池田山古墳（県遺跡地図番号：030037）」「塚口山廬遺跡（県遺跡地図番号：030109）」が存在している。そのため県教育委員会は平成24年度に、主要地方道尼崎池田線からJR福知山線にかけての東西約270mの区間について、阪神南県民局長の依頼（平成24年7月31日付け神南（西土）第1416号）に基づき、確認調査を実施した。調査の体制・期間等は第2表に示す（以下、同）。

調査地が工場の敷地内であるため、車両の通行の妨げとならない場所に、10箇所の調査グリッド（1G～11G、6Gは欠番）を設定した。2m×2mの大きさを基本とするが、埋設管などの関係で掘削範囲を狭めた地点も多い。

調査の結果、1Gで古墳時代の溝、2Gで中世の柱穴、3Gで池田山古墳の周濠の痕跡を検出した。また10G・11Gで見つかったシルト層は古墳の墳丘を採掘したあとの溜池の堆積物とみられ、墳丘の規模・形状を知る手がかりとなるものと考えられた。これにより西半部の約150m区間には、池田山古墳および塚口山廬遺跡の遺構が存在することを確認した。ただし一部では過去の掘削によって遺構が失われている範囲もある。

区間の北東隅にあたる8Gでは弥生時代～古墳時代の遺構が見つかり、塚口山廬遺跡の範囲が区間の東端にまで広がることが判明した。しかしその中間の4G・5G・7G・9Gでは、工場建設時の大規模な造成による削平が観察されており、遺構が残存するのは8G周辺の駐車場の範囲に限られるものと判断できた。

調査結果については、平成24年10月1日付け兵考第1382号により、県教育委員会から西宮土木事務所に通知した。

第2表 調査一覧

遺跡調査番号	調査種別	調査期間	調査面積	調査機関	調査担当者
2012139	確認調査	平成24年9月11～15日	40m ²	兵庫県立考古博物館	総務部 埋蔵文化財課 多賀茂治
2014088	本発掘調査	平成26年10月4日～平成27年1月9日	223m ²	(公財)兵庫県まちづくり技術センター	埋蔵文化財調査部 調査第2課 渡辺昇・別府洋二
2016057	本発掘調査	平成28年7月19日～8月10日	211m ²	兵庫県立考古博物館	総務部 埋蔵文化財課 村上泰樹
2017064	本発掘調査	平成29年7月24日～28日、9月4日～11日	140m ²	兵庫県立考古博物館	総務部 埋蔵文化財課 中川涉・上田健太郎

第2節 平成26年度の本発掘調査

調査予定箇所のうち、本線から側道にかかる2箇所の部分について、先行調査することとなり、阪神南県民センター長の依頼（平成26年7月24日付け神南（西土）第1554号）に基づき、県教育委員会からの委託を受けた（公財）兵庫県まちづくり技術センターが本発掘調査を実施した。

路線の北側にあたる1区では、池田山古墳の墳丘基底部と考えられる高まりと、周濠の残存部を検出し、葺き石に使われたとみられる円礎が出土した。一方、南側の2区では、中世以降の遺構・遺物が出土した。

調査結果については、県教育委員会から西宮土本事務所に通知した。

第3節 平成28・29年度の本発掘調査

事業地北東隅のJR福知山線に接する箇所について、踏切の移設工事を進めることになり、発掘調査工程の調整を行った。今回は迂回路を切り替えながら進める必要がある上、工場の通行車両との調整など現場管理が困難なため、本体工事業者から掘削重機、発掘調査作業員、測量実測員の提供を受けて、調査を実施した。

平成28年度には調査対象範囲の主に北半部について、阪神南県民センター長の依頼（平成28年5月17日付け神南（西土）第1173号）に基づき、本発掘調査を実施した。

平成29年度の調査区は工事の際の歩道確保の関係上、1区と2区に分かれており、1区は前年度調査区の東辺と南辺に接した鍵形で、2区は水路を挟んだその南側に位置する。阪神南県民センター長の依頼（平成29年7月10日付け神南（西土）第1218号）に基づき、2時期に分けて本発掘調査を実施した。

調査の結果、弥生時代後期の掘立柱建物、古墳時代後期の掘立柱建物・溝などを検出し、弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡であることが明らかとなった。

平成28年度の調査結果と29年度の調査結果（平成29年11月29日付け教文第1313号）は、県教育委員会から西宮土本事務所に通知した。

今回の調査報告書の内容は、この年度の調査成果である。

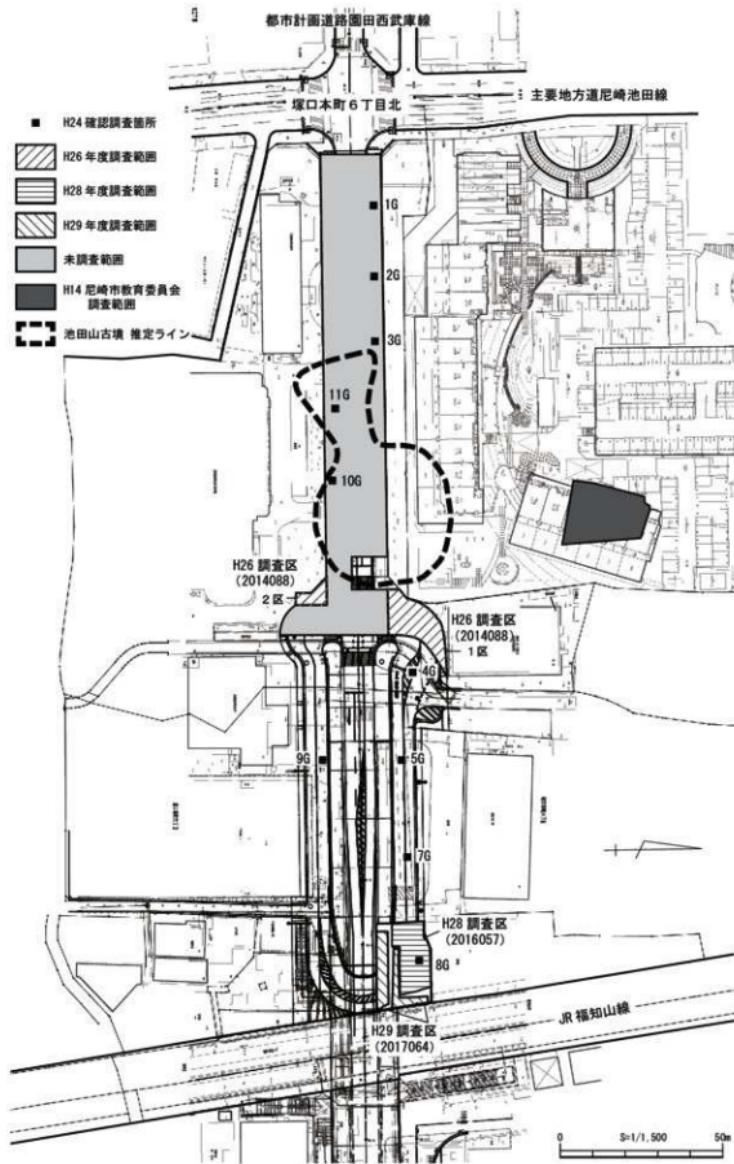
第4節 出土品整理・報告書作成作業

同遺跡の平成28・29年度分の本発掘調査出土品の整理作業については、阪神南県民センター長の依頼（平成31年4月23日付け神南（西土）第1081号）を受け、作業を（公財）兵庫県まちづくり技術センターに委託し、令和元年度に下記の工程・体制で実施した。

令和元年度に、出土遺物のネーミング、接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、金属器の保存処理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷を行った。整理作業担当職員は以下の通り。

整理担当職員 中川涉 大嶋昭海

非常勤嘱託員 柏木明子



第2図 調査区位置図

第3章 調査の成果

第1節 調査成果の概要

今回の調査で確認された遺構や遺物の多くは弥生時代～古墳時代に属する。遺構は掘立柱建物6棟、溝状遺構3条、その他柱穴多数を検出した。出土遺物は古墳時代の溝から多く出土しており、その他に柱穴から弥生土器および土師器等が出土している。

先述したように、調査は平成28年度調査と平成29年度調査の2年に分けて行われた。もっとも、各調査区は隣接していること、調査区を跨ぐる遺構も複数あることから、本報告では各概要だけ記して、遺構や遺物については一括の調査成果として扱う。

平成28年度は、調査面積211m²の範囲を調査して、掘立柱建物4棟、溝状遺構2条を検出した。今回報告するほとんどの遺構と遺物は平成28年度の調査区で出土したものである。もっとも、調査段階では明確な掘立柱建物は検出できなかった。

平成29年度は、調査面積140m²を調査した。工程上、北側の調査区を1区、南側の調査区を2区として調査を行った。調査区は平成28年度調査区の東側（1区の一部）および南側である。1区では、平成28年度の調査区とつながる掘立柱建物SB2を検出した。2区では、調査区西側で溝状遺構SD1の続きを検出した。その他、時期不明の溝状遺構SD3や土坑や柱穴を検出したが、擾乱が非常に多く、その様相は明確でなかった。

第2節 基本土層（図版2）

本調査区は市街地ということもあり、全面がアスファルトで覆われていた。アスファルト下は、Ⅰ層とした整地層、旧耕土であるⅡ層、遺物包含層であるⅢ層、砂礫混じりの褐色シルト質土のⅣ層が堆積していた。砂礫を多く含むⅣ層は扇状地堆積物あるいはそれを覆う洪水堆積物に相当すると考えられる。遺物包含層であるⅢ層は平成29年度調査区の一部のみで確認されており、Ⅱ層である旧耕作土形成に伴い、削平を受けたと考えられる。その時期は定かでないが、尼崎市による調査や平成24年度調査では中世の遺物が出土しており、段丘面の畑化は中世以降に進んでいた可能性がある。

第3節 掘立柱建物

掘立柱建物を6棟検出した。いずれも整理作業段階で検出したものであり、調査段階で検出していない。出土遺物や切り合い関係、主軸の向きから弥生時代の建物3棟と古墳時代の建物2棟、時期不明の建物1棟に分けることができる。

掘立柱建物 SB1（図版3）

H28調査区とH29-1調査区に跨がって検出された。東西方向に軸をもつ、梁間2間×桁行3間の總柱掘立柱建物跡である。西側の梁行側に近接棟持柱の可能性のある柱穴を有する。東側の梁行側はH28調査区～H29-1調査区間に未掘部があるため不明である。柱間は梁行側で1.7m～2.0m、桁行側で1.5m

～2.2mを測る。P1・P2・P7を除く柱穴はそれぞれが2重に切りあっており、建て替えの可能性がある。その場合、全ての柱穴が南北に切り合っており、建て替え時も東西軸を重視していた可能性がある。

柱穴から明確に時期が判断できる遺物は出土していない。もっとも、同じ東西軸をもつSB5が弥生時代後期後半～終末期の掘立柱建物であること、古墳時代の溝状造構SD1と軸を異にすることから、SB1は弥生時代後期後半～終末期の掘立柱建物である可能性がある。

掘立柱建物 SB2（図版4）

H28調査区とH29-1調査区にわたって検出された。東西方向に軸をもつ、梁間2間×桁行3間以上の掘立柱建物である。P2・P3間とP5・P6間は擾乱があるが、他の柱間間隔を考慮すると、本来は柱穴が存在したと考えられる。柱間は梁行側で1.6m～1.8m、桁行側で1.6m～1.8mを測る。SB1と同一軸かつ規模もほぼ等しいため、その関連性が考えられるが、切り合い関係も含めて詳細は不明である。

柱穴から時期が判断できる遺物は出土していない。SB1と同様、同じ東西軸をもつSB5が弥生時代後期後半～終末期の掘立柱建物であること、古墳時代の溝状造構SD1と軸を異にすることから、SB2は弥生時代後期後半～終末期の掘立柱建物である可能性がある。

掘立柱建物 SB3（図版5・10）

H28調査区中央北側で検出された。梁間2間×桁行2間以上の掘立柱建物跡が想定される。P4はSD1に切られている。梁行と桁行の関係は厳密には不明であるが、柱穴の規模を考えると桁行3間以上が想定されるので、南北を軸にもつと考えられる。柱間は梁行側で1.7m～2.2m、桁行側で2.6mを測る。柱穴（P2）は最大径1.0mと本遺跡では規模が一番大きい。

P1からは須恵器片（1・2）が出土した。1は台付椀である。口縁部～胴部下位にかけての破片である。2は壺の頸部片である。突帯を挟んで上下に波状文が施される。

出土遺物から明確な時期の位置づけは難しいが、P1が6世紀後半代のSD1に切られていることを考慮し、SB3は6世紀前半頃に位置づけておく。

掘立柱建物 SB4（図版6）

H28調査区西側で検出された。梁間2間×桁行2間の掘立柱建物跡と考えられる。SB4周辺からは非常に多くの柱穴が検出されており、掘立柱建物の認定は困難であったが、同一規模の柱穴および柱間間隔を考慮してSB4を認定した。柱間は梁行側で1.7m～2.0m、桁行側で1.6～2.2mを測る。

柱穴から明確に時期が判断できる遺物は出土していないが、古墳時代後期のSD1と同一軸を有することと、近辺に古墳時代の柱穴が多いことから、古墳時代後期の掘立柱建物である可能性が高い。

掘立柱建物 SB5（図版7・10）

H29-2調査区の東側で検出された。梁間1間以上×桁行3間の掘立柱建物跡である。南側は調査区外へ延びている可能性が高く、梁間は2間以上になる可能性が高い。柱間は梁行側で1.4m、桁行側で1.2mを測る。柱間間隔が狭いことから側柱建物と考えられる。なお、P2の柱底の下からは弥生土器の小形の壺が形をある程度保った状態で出土した。出土状況からは、柱を抜いた後に壺を柱穴の中に入れたものと考えられる。

出土遺物は前述のようにP2から弥生土器の壺（3）が出土した。小型の短頸壺で、外面は水平～浅い右上がりのタタキ目が顕著に残っている。底部のみ黒斑が顕著である。

遺物の時期は、弥生時代後期後半～終末期に位置づけられる。SB5の時期も同様に考えたい。

掘立柱建物 SB6（図版8）

H28調査区の北西側で検出した。梁間1間×桁行2間の掘立柱建物跡である。柱間は梁行側で1.3m、桁行側で1.8m～2.0mを測る。本遺構の中央からは土坑SK1を検出した。SB6とSK1が有機的な関係を有しているかは不明な部分が多いが、関連性を考慮して図に掲載している。なお、遺構配置図にのみ図示しているが、SB6の東西には浅い溝が通っていた痕跡が僅かに残っていた。

出土遺物はないため時期は不明であるが、本遺構と軸を同一にするSD2が中～近世の掘削と考えられるので、本遺構も同様な時期の可能性がある。

第4節 土坑・柱穴

調査区からは、第3節で報告した掘立柱建物以外にも100基近い柱穴と考えられる小穴を検出した。今回、掘立柱建物として報告するのは6棟であるが、柱穴の数から考えると、時期を変遷しながらも、6棟以上の建物が存在した可能性は高い。ここでは、土坑も含め、掘立柱建物以外の柱穴を報告する。

土坑 SK1（図版8）

H28調査区の北西側で、SB6の中央部で検出した。長軸1.0m、幅0.8mの隅丸長方形の土坑である。深さは9～11cm程とかなり浅いが、後世の削平の影響が考えられる。底面はやや北から南に向かって傾斜している。先にも述べたように、SB6との位置関係から、両者の有機的な関係が考えられる。

出土遺物はないが、SB6でも述べた通り、軸を考慮するならば中～近世の時期が考えられる。

土坑 SK2（図版8）

H28調査区の北側中央部で検出された。最大幅1.1m、最小幅1.0mの隅丸方形の土坑である。深さは0.5mを測る。本遺構からは柱痕が検出されており、柱穴としての用途があったことがわかる。規模はその他の柱穴と比べて大きい。本柱穴とSB3の柱穴はほぼ同等の規模を有するが、調査では組み合う柱穴を確認することができなかつたため、本報告では土坑として報告する。

出土遺物はないが、先に述べたように同等の規模の柱穴はSB3しかないので、本柱穴も古墳時代後期と位置づけておきたい。

出土遺物（図版10）

土師器や須恵器、弥生土器、石器が出土している。4はSP8から出土した土師器壺の把手部分である。5はSP88から出土した須恵器壺の口縁部片である。波状文が施されている。6～8は弥生土器である。6はSP2から出土した有孔鉢の底部である。器壁は非常に薄い。孔は焼成後に内側から穿孔されている。7はSP29から出土した、甌の底部片である。器壁が厚く、しっかりしたつくりである。底部を強く横にナデ整形している。8はSP37から出土した甌の底部片である。右上がりのタタキ目が残る。底部の

内面は幅2cmほどの板状工具痕が複数認められた。S1はSP19から出土したサヌカイト製の打製石器である。平面形は平基式で、先端部が欠けている。幅18mm、残存長19.5mm、厚さ4mm、重さ1.1gを測る。その他、図示していないが、サヌカイト製の剥片も1点出土している。

第5節 溝状遺構

調査区からは、古墳時代の溝1条と中世以降の溝2条の計3条の溝が検出された。

溝状遺構 SD1 (図版9~11)

H28調査区とH29-2調査区に跨って検出された。溝の最大幅は0.8m、深さは0.4mを測る。検出した長さは20mであるが、両端が調査区外に延びるため、総長は不明である。検出面より下を直角に近い角度で掘削しており、底面は平坦になっている。もっとも、検出面より上は後世に削平されており、壁面はこのまま直線状になるか、斜めに開くかは不明である。本遺構を境に西側は顕著に柱穴が多くなるので、SD1はなにかしらの区画溝としての用途があったと考えられる。

本遺構からは多くの出土遺物があった。9~20は須恵器である。9は壺蓋である。天井部と口縁部の境は明瞭ではないが、口端部は内斜している。10~13は壺身である。10は口縁立ち上がりが長く、端部は丸い。回転ヘラ削りは底部中位から施されている。11は口縁立ち上がりが長く、直線的に内斜する。底面は扁平で、回転ヘラ削りは底部周辺にのみ施される。12は口縁立ち上がりが内斜して短いが端部は水平気味になる。13は口縁立ち上がりが直線的で端部は丸い。回転ヘラ削りは底部中位から施されている。14~15は壺である。14は有蓋壺の口縁部片である。口縁端部は直線的に内傾して端部は丸い。受け部~頸部の境には波状文が上下で2単位分施されている。上部の波状文は下の部分の約3mm幅がナデ消されている。波状文帯の下は、頸部と口縁部を区分するために稜がつけられている。15は壺の胴部片である。上部と下部にカキメが顕著にみられる。15は14の有蓋壺と同質胎土で、焼成具合も似ていることから、同一個体である可能性がある。ただ、装飾性の高い有蓋壺の胴部にしては文様が認められず、他の類例に比して胴部最大径が下部に寄ることから、本報告では別個体として報告する。16は横瓶の胴部である。外面は同心円状にカキメが残り、端部は自然釉が掛かっている。内面は接合痕が顕著に残っている。17~19は高杯である。17は脚部上部~杯基部の破片である。脚部には方形透かしが2箇所確認できるが、配置上、3箇所に存在していたと考えられる。18は脚部である。沈線と突線で分割された上下2段に方形透かしが確認できる。方形透かしこそは下段に3箇所、上段に2箇所確認できるが、配置上、上段も2箇所あったと考えられる。下段文様帶にはカキメの上から波状文が上下2単位分施されている。19は脚部である。下段1箇所、上段2箇所の上下2段に方形透かしこそは確認できるが、配置上、上下共に3箇所存在したと考えられる。20は壺の底部~胴部片である。底部と胴部の境には焼成時固定痕が残り、その箇所より上の胴部は自然釉が顕著に掛かるが、下部には認められない。内面の胴部~底部の境部分に灰の付着が顕著にあり、自然釉が掛かっている。

21は土師器の甕の口縁部片である。外面は横方向の板ナデが認められる。22~25は弥生土器の甕の底部片である。22は外面にタタキ、内面は板状工具の形成痕がある。25は上げ底になっている。26は弥生土器の直口鉢である。摩滅で調整は不明である。27~28は弥生土器の高杯である。27は杯部~脚部の破片で、摩滅で調整が不明な部分が多いが、一部ミガキが確認できる。台付鉢の可能性もある。28

は脚部分である。摩滅が著しく、調整は不明である。

29は形象埴輪の破片である。底面、側面、前面の3面で構成されており、隅は直角に近い角度で屈曲している。図上は地面に垂直に表したが、底面を地面に水平に置くと、側面は15度程度外側に傾く。外面調整は風化により調整不明だが、内面は比較的丁寧にナゲ整形している。内面隅は外面に比較して緩やかに屈曲しており、指あるいは工具を用いて整形している。その形態から、家形埴輪の軸部あるいは圓形埴輪の隅部の可能性がある。根まわり突帯等の貼り付け痕などは確認できず、柱形等の表現もないとみる。家形埴輪の場合は軸部の突帯の下部分あるいは突帯表現等のない大型形の可能性がある。

溝状遺構 SD2（図版9）

H28調査区を南北に走る溝である。最大幅は0.4m、深さ0.1mを測る。検出した長さは7.9mである。溝はH28調査区の南端近くまで延びて一部を擾乱で壊されているが、H29-2調査区までは延びていない。深さはSD1と比較して浅く、削平分を考慮しても、あまり大規模な溝ではなかったと考えられる。

遺物は図示していないが、中～近世の陶器が出土している。本遺構の時期も同様に考えられる。

溝状遺構 SD3（図版9）

H29-2調査区の中央部で検出した。最大幅は0.5m、深さ0.2mを測る。検出した長さは0.6mである。本遺構もSD1と比較して浅く、SD2と同様に大規模な溝ではなかったと考えられる。

遺物は出土していない。軸がSD2と同様であることから、本以降の時期も中・近世以降の溝と考えられる。

第3表 挖立柱建物一覧

遺構番号	図版番号	梁行×桁行	梁行間(m)	桁行間(m)	主軸方向	時期	備考
SB1	図版3	2×3	1.7～2.0	1.5～2.2	N-110°-W	(弥生時代後期後半～終末期)	純柱建物、近接棟持柱？
SB2	図版4	2×(2)	1.6～1.8	1.6～1.8	N-107°-W	(弥生時代後期後半～終末期)	
SB3	図版5	2×(1)	1.7～2.2	2.6	(N-161°-W)	古墳時代後期前半	
SB4	図版6	2×2	1.7～2.0	1.6～2.2	N-49°-W	(古墳時代後期後半)	
SB5	図版7	(1)×3	1.4	1.2	N-90°-W	弥生時代後期後半～終末期	
SB6	図版8	1×2	1.3	1.8～2.0	N-7°-E	中世以降か	SK1と関連性あるか

第4表 土器観察表

番号	図 番号	地C 地S	造形	種類	器種	法量 (cm)			調整		施成	色調	胎土	備考
						口径	高さ	底径	内面	外面				
1	図10 写11	H28 SB3 -P1	須恵器	呑口鉢	(10.8) (6.2)	-	回転ナデ	回転ヘラケズリ	良好	7.35/1灰 5.5/1灰	~φ1mmの 砂粒少			
2	図10 写11	H28 SB3 -P1	須恵器	壺	-	(3.1)	-	回転ナデ	回転ナデ	良好	84/灰	粗砂少	波状文	
3	図10 写11	H29-2 SB5 -P2	弥生 土器	壺	-	(10.95)	3.3	ハケメ	平行タキ	不良	10.95/3 にぶい黄	~ φ1mmの砂粒 粗砂多		
4	図10 写11	H28 SP8	土師器	瓶形手	長さ (4.45)	幅 (7.35)	厚さ 2.15	ナデ	ナデ	不良	7.35R/4 灰黄相	粗砂多		
5	図10 写11	H28 SP88	須恵器	壺	-	(1.5)	-	回転ナデ	回転ナデ	良好	NT/灰白	粗砂少	波状文	
6	図10 写11	H29-1 SP2	弥生 土器	有孔鉢	-	(2.65)	2.85	ナデ	ナデ	不良	10.95/3 灰黄相	φ1mmの砂粒 粗砂多		
7	図10 写11	H28 SP29	弥生 土器	甕	-	(2.75)	(5.2)	磨滅	横ナデ	不良	5.5R/6灰	~ φ1mmの砂粒 粗砂多		
8	図10 写11	H28 SP37	弥生 土器	甕	-	(2.85)	(4.05)	板ナデ	平行タキ	不良	10.95/7/2 にぶい黄	φ1mmの砂粒 粗砂多	放射状に 工具痕	
9	図10 写12	H28 SB1	須恵器	环蓋	(13.9)	(4.2)	-	回転ナデ	回転ナデ	普通	5.5R/1灰	φ1mmの砂粒 少量		
10	図10 写12	H29-2 SB1	須恵器	环身	(12.6)	(3.8)	(11.7)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	やや 不良	5.5R/1灰	φ1mmの砂粒 粗砂多		
11	図10 写12	H29-2 SB1	須恵器	环身	(12.9)	3.85	(11.7)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	普通	10.95/1灰	φ1mmの砂粒 粗砂多		
12	図10 写12	H29-2 SB1	須恵器	环身	(13.2)	(3.9)	-	回転ナデ	回転ヘラケズリ	普通	5.5R/灰	φ1~3mmの砂粒 粗砂多		
13	図10 写12	H29-2 SB1	須恵器	环身	(11.9)	(4.15)	(11.2)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	普通	5.5R/灰	~ φ1mmの砂粒 少量、粗砂多		
14	図10 写12	H28 SB1	須恵器	有盖罐	(10.3)	(7.0)	-	回転ナデ	回転ナデ	普通	5.5R/1灰	φ1mmの砂粒 少量、粗砂多	波状文	
15	図10 写12	H28 SB1	須恵器	壺	-	(10.8)	腹径 (19.7)	回転ナデ	カキメ	良好	84/灰 5.5/2灰白	φ1mmの砂粒 粗砂多		
16	図10 写12	H28 SB1	須恵器	横瓶	-	(18.8)	-	回転ナデ	回転ナデ	良好	5.5R/1灰白	粗砂多	粘土織目	
17	図10 写13	H28 SB1	須恵器	高环	-	(5.25)	-	回転ナデ ナデ	回転ナデ	普通	5.5R/灰	粗砂多	方形透かし 三方向	
18	図11 写13	H29-2 SB1	須恵器	高环	-	(9.8)	(13.7)	回転ナデ	カキメ	良好	5.5R/灰	φ1mmの砂粒 粗砂多	波状文 方形透かし 三方向	
19	図11 写13	H29-2 SB1	須恵器	高环	-	(10.15)	(14.0)	回転ナデ	カキメ	普通	NT/暗灰	粗砂多	方形透かし 三方向	
20	図11 写13	H28 SB1	須恵器	甕	-	(17.3)	-	同心円 当て具	平行タキ カキメ	普通	2.55T/1 灰白	粗砂多		
21	図11 写14	H29-2 SB1	土師器	甕	-	(5.5)	-	横ナデ 板ナデ	横ナデ	やや 不良	10.95/6/2 灰黄相	φ1mmの砂粒 粗砂多		
22	図11 写14	H28 SB1	弥生 土器	甕	-	(3.7)	4.7	板ナデ	平行タキ ナデ	不良	7.35R/7/4 にぶい	φ1mmの砂粒 粗砂多	放射状に 工具痕	
23	図11 写14	H28 SB1	弥生 土器	甕	-	(3.15)	4.3	ナデ 指押さえ	ナデ	不良	5.5R/7/4 にぶい	φ1~2mmの砂粒 粗砂多		
24	図11 写14	H28 SB1	弥生 土器	甕	-	(2.15)	6.1	磨滅	ナデ 板ナデ	不良	2.55R/2 灰黄	φ1~2mmの砂粒 粗砂多		
25	図11 写14	H28 SB1	弥生 土器	甕	-	(2.4)	(4.3)	ナデ	横ナデ 指押後ナデ	普通	10.95/4/1 灰白	φ1mmの砂粒 粗砂多		
26	図11 写14	H28 SB1	弥生 土器	直口鉢	-	(3.6)	(2.95)	磨滅	高減	不良	10.95R/3 灰黄相	φ1~2mmの砂粒 粗砂多		
27	図11 写14	H28 SB1	弥生 土器	高环	-	(4.2)	-	磨滅	ナデ 一括ミガキ	不良	7.55R/7/6橙	台付鉢か		
28	図11 写14	H28 SB1	弥生 土器	高环	-	(6.65)	-	ナデ	磨滅	不良	5.5R/7/6橙	~ φ1mmの砂粒 粗砂多		

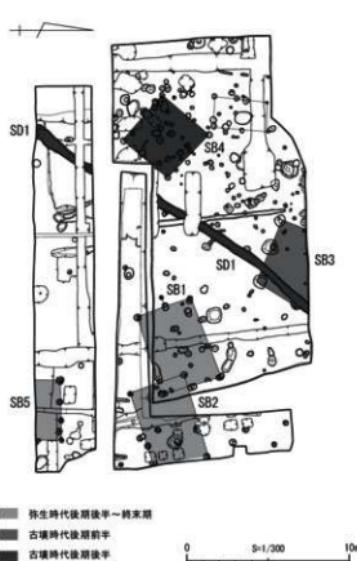
第4章 まとめ

第1節 調査のまとめ

本調査では、弥生時代の掘立柱建物3棟、古墳時代の掘立柱建物2棟と溝状遺構1条、中世以降の掘立柱建物1棟と溝状遺構2条が確認された。尼崎市教育委員会による既調査の様相と同様、弥生時代後期後半～終末期、古墳時代後期、中世以降にかけての集落の広がりが確認され、段丘を利用した各時代の集落の様相の一端が明らかになった。特に既調査では確認されていなかった各時代の建物跡が検出された意義は大きい。ここでは、中心となる弥生時代と古墳時代について、明らかになったことをまとめたい。

弥生時代

弥生時代では後期後半～終末期の可能性のある掘立柱建物3棟を検出した。出土した遺物の様相は尼崎市の既調査とほぼ同一であるが、既調査では検出されていない、明確な建物跡が確認できたのが成果といえる。なお、検出した掘立柱建物は全て調査区の東側に偏って確認された。このことから、弥生時代後期後半～終末期の集落は調査区から東側の段丘内側に向けて広がっていく可能性が高い。本調査だけでは不明な点が多いが、SB1が近接構持柱の絶柱掘立柱建物で良いとすると、建物の特殊性から鑑みて、本調査区周辺が集落の中心を構成していたであった可能性がある。



第3図 時期別遺構配置図

古墳時代

古墳時代では6世紀前半の建物1棟、6世紀後半の建物1棟と溝状遺構を検出した。弥生時代同様、既調査区では検出されていない建物跡が確認できた点が成果と言える。また、本調査区では溝状遺構SD1から多くの遺物が出土したが、そのSD1を境にして遺構密度が変化していることを踏まえ、SD1の用途を区画溝と推定した。SB3→SD1・SB4の前後関係が考えられることから、SB3廃絶後にSD1で集落を区画しつつ、区画溝と同軸のSB4が建てられた変遷がうかがえる。

出土遺物では、形象埴輪片と須恵器の有蓋壺が出土した点が注目される。形象埴輪片は先に述べたように家形あるいは圓形の可能性があるが、時期等は明確でない。有蓋壺は、近隣の園田大塚山古墳（尼崎市1987）のように、装飾付の蓋が組み合わされる例が多く、本例もその可能性がある。また、有蓋壺は上記例のよう

に基本的には古墳に伴って出土する場合が多いが、本例は集落出土である点が注目される。もっとも、他の集落遺跡出土例は神戸市松野遺跡（神戸市 2001）のように居館を有するような特別な集落であり、本遺跡が猪名野古墳群の立地する段丘上にある点を考慮すると、有蓋蓋は遺跡近隣の古墳築造を契機に本遺跡に持ち込まれた可能性がある。その場合の対象古墳としては、遺跡西側に隣接する前方後円墳である池田山古墳、あるいは尼崎市によって平成 14 年に調査された 1 辺 13m の埋没古墳の方墳が考えられる。そこで、有蓋蓋が兵庫県内で MT15 ~ MT43 型式の時期に出土することを考慮すると、池田山古墳は前期～中期と考えられるので該当せず、後期とされる埋没方墳がその候補に挙がる。形象埴輪が同時期のものであるかは不明であるが、古墳と集落の関係の一端がうかがえる。

参考文献

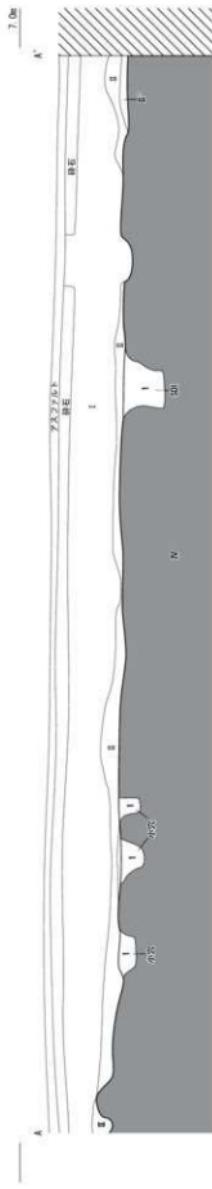
- 尼崎市教育委員会 1987『尼崎市中ノ田遺跡（大塚山古墳を中心）』
神戸市教育委員会 2001『松野遺跡発掘調査報告書第 3 次～7 次調査』

図 版

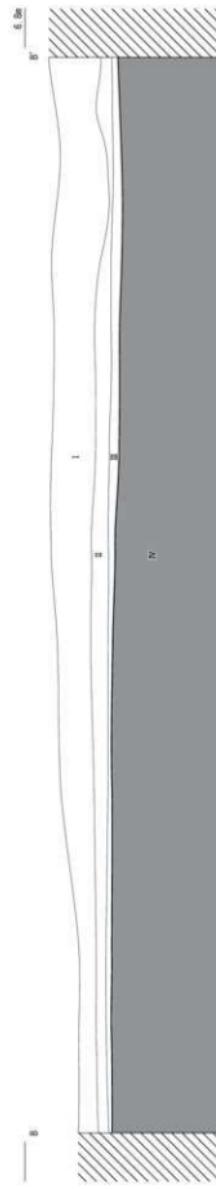


造構配置図

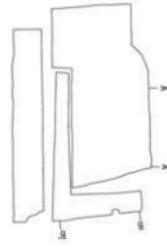
H28 調査区北壁



H29-1 調査区東壁



土層断面図



基本土層

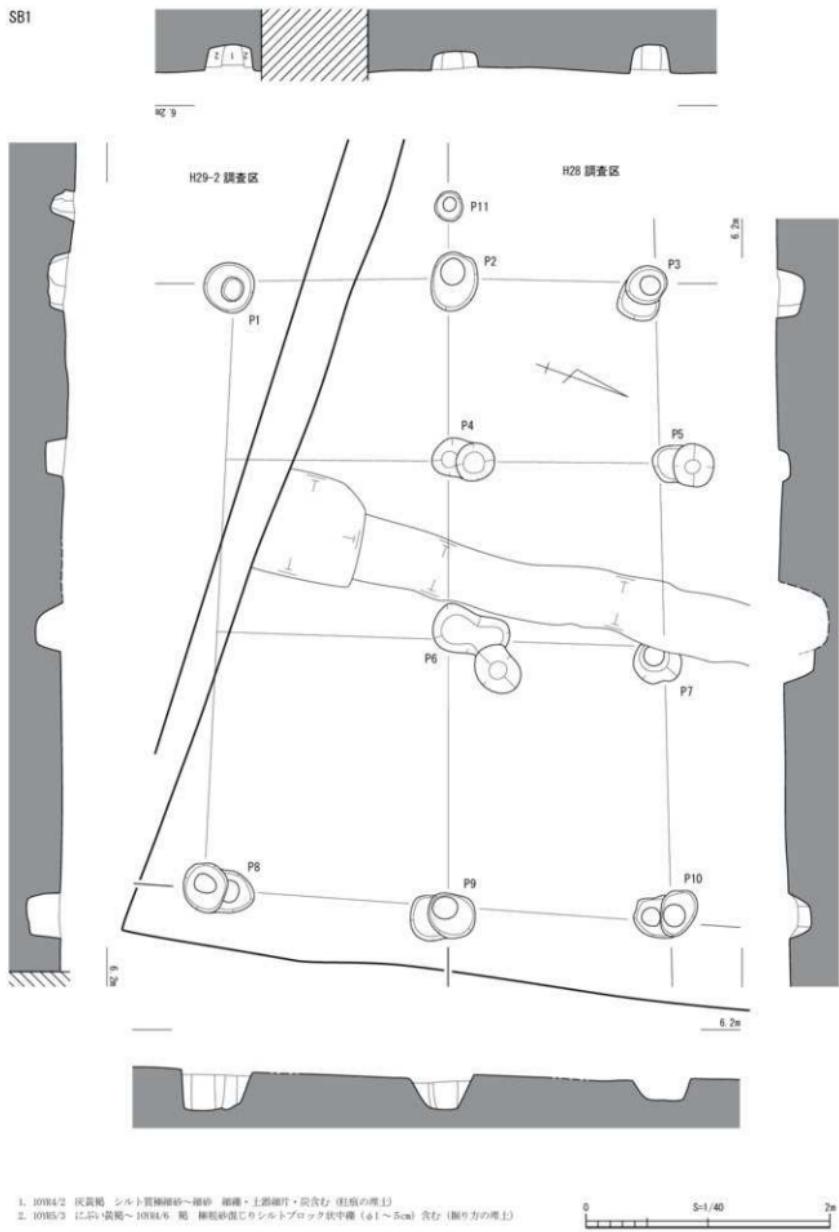
- I. アスファルトを含むくだけた砂の地盤
 - II. 地山
 - III. 1000/1 岩
 - IV. 1000/1 岩
 - V. 1000/4 2-25-1 岩
 - VI. 1000/6 岩
 - セメント
1. アスファルトを含むくだけた砂の地盤
2. 地山
3. 1000/1 岩
4. 1000/1 岩
5. 1000/4 2-25-1 岩
6. 1000/6 岩
セメント

小穴

- I. 2-25-1 岩
 - II. 溶けた透鏡 SD 1
 - III. 2-25-1 岩
1. 2-25-1 岩
2. 溶けた透鏡 SD 1
3. 2-25-1 岩

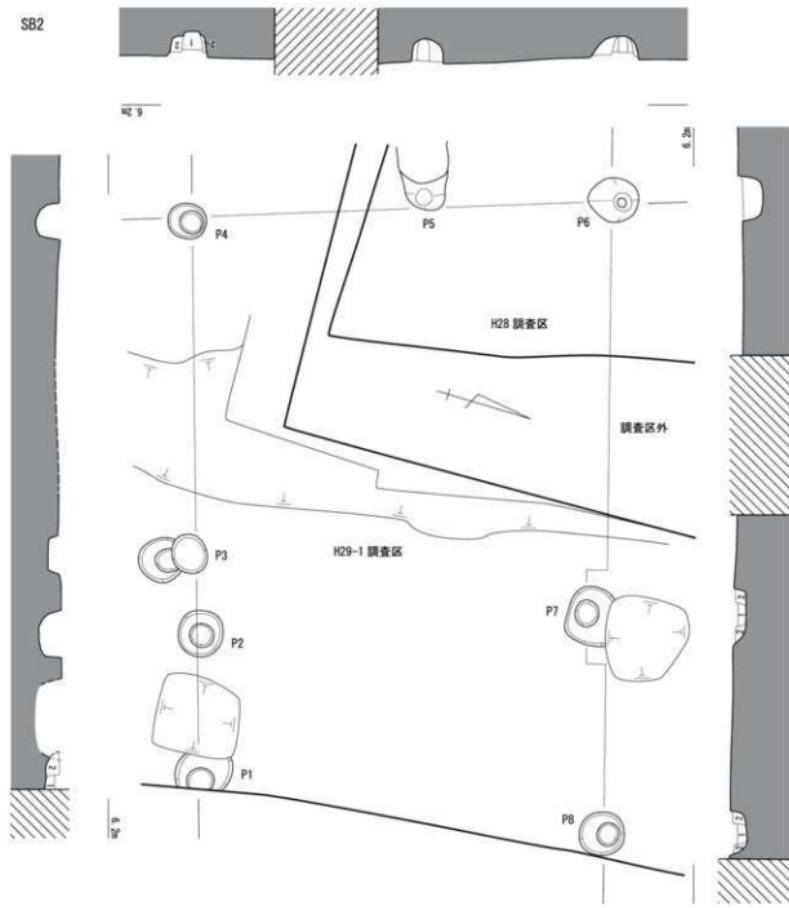
0 50 100 150 200

SB1



掘立柱建物 SB1

図版 4

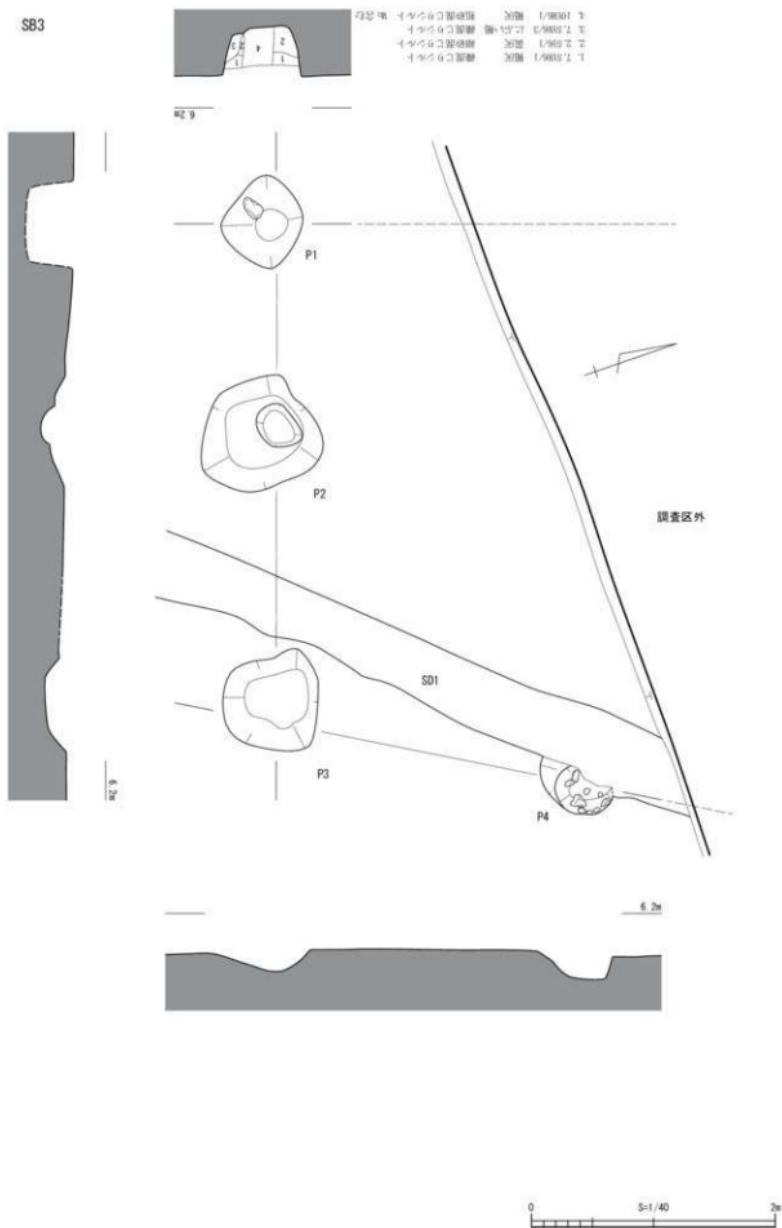


1. 10B4/2 灰黄褐色、シート質極細砂～細砂、緻密・土器細片・炭化物（柱底の埋土）
2. 10B5/2 にぶら黄褐色～10B4/6 白 極粗砂混じりシルトブロック状中層（φ1～5cm）含む（振り方の埋土）

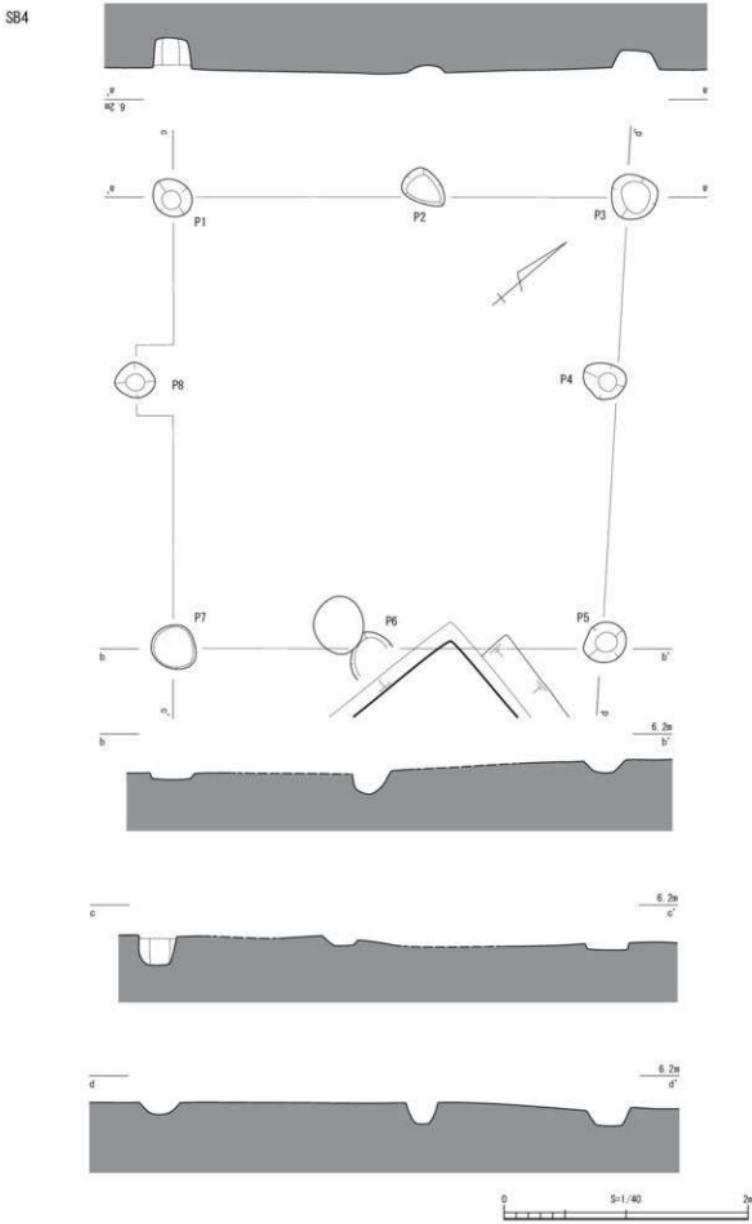
0 S=1/40 2m

掘立柱建物 SB2

SB3

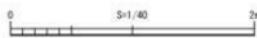
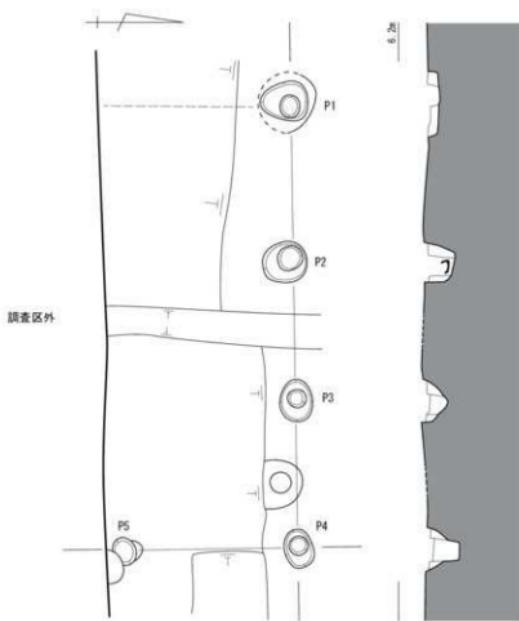


図版 6

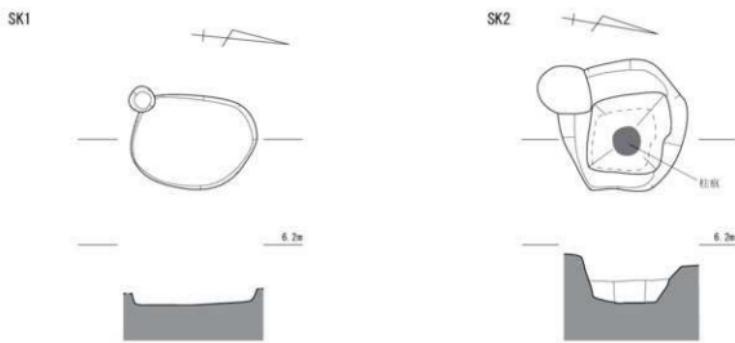
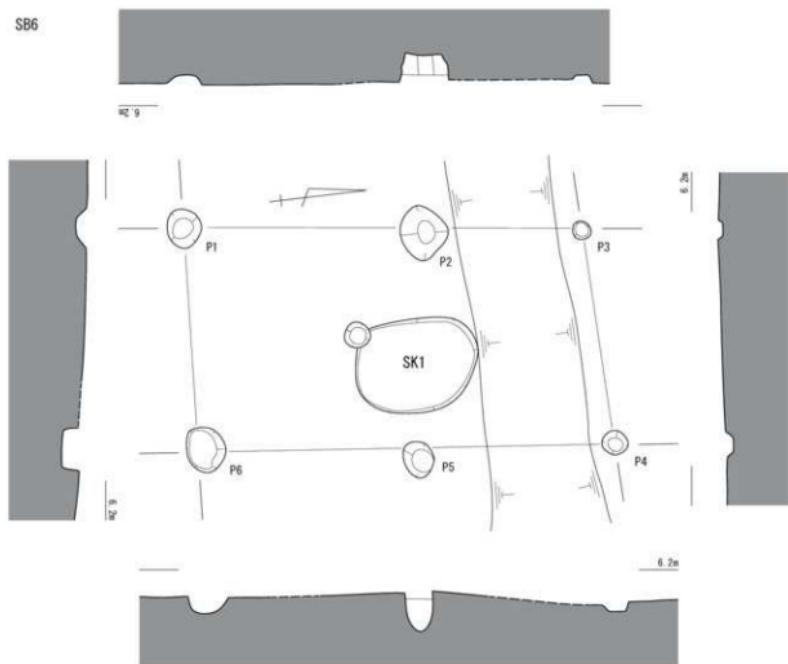


掘立柱建物 SB4

S85



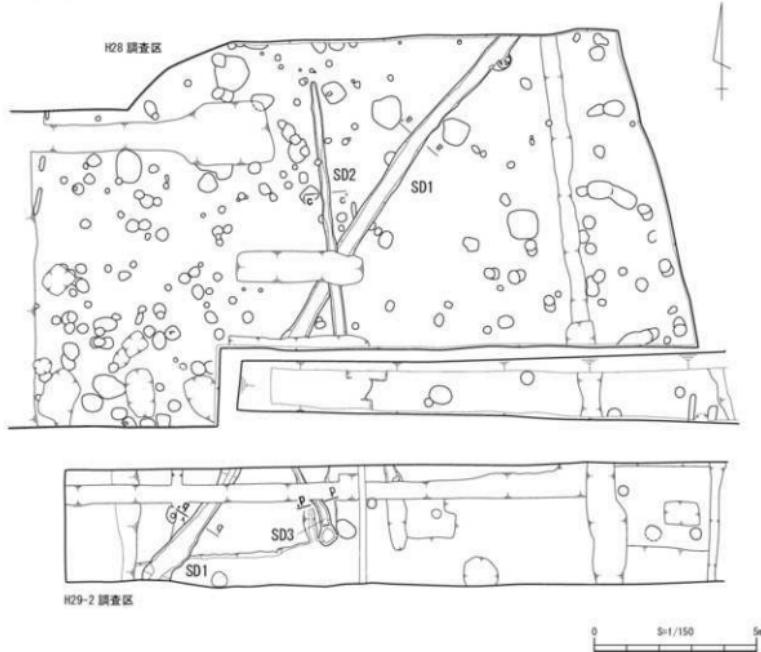
掘立柱建物 S85



0 5:1/40 2m

掘立柱建物 SB6・土坑 SK1・土坑 SK2

溝状造構配置図



SD1

a ————— 6.2m
a'



1. 101B6/1 極況 中砂～粗砂混じりシルト 岩含む
2. 101B5/1 極況 シルト質中砂～粗砂 土解消含む
3. 101B5/1 極況 シルト質細砂～中砂

b ————— 6.2m
b'



1. 101B4/1 極況 シルト～細砂 岩含む
2. 101B4/2 灰黃褐色 シルト質細砂 地山をブロック状に含む。(特に右側の立ち上がり部分)

SD2

c ————— 6.2m
c'



SD3

d ————— 6.2m
d'

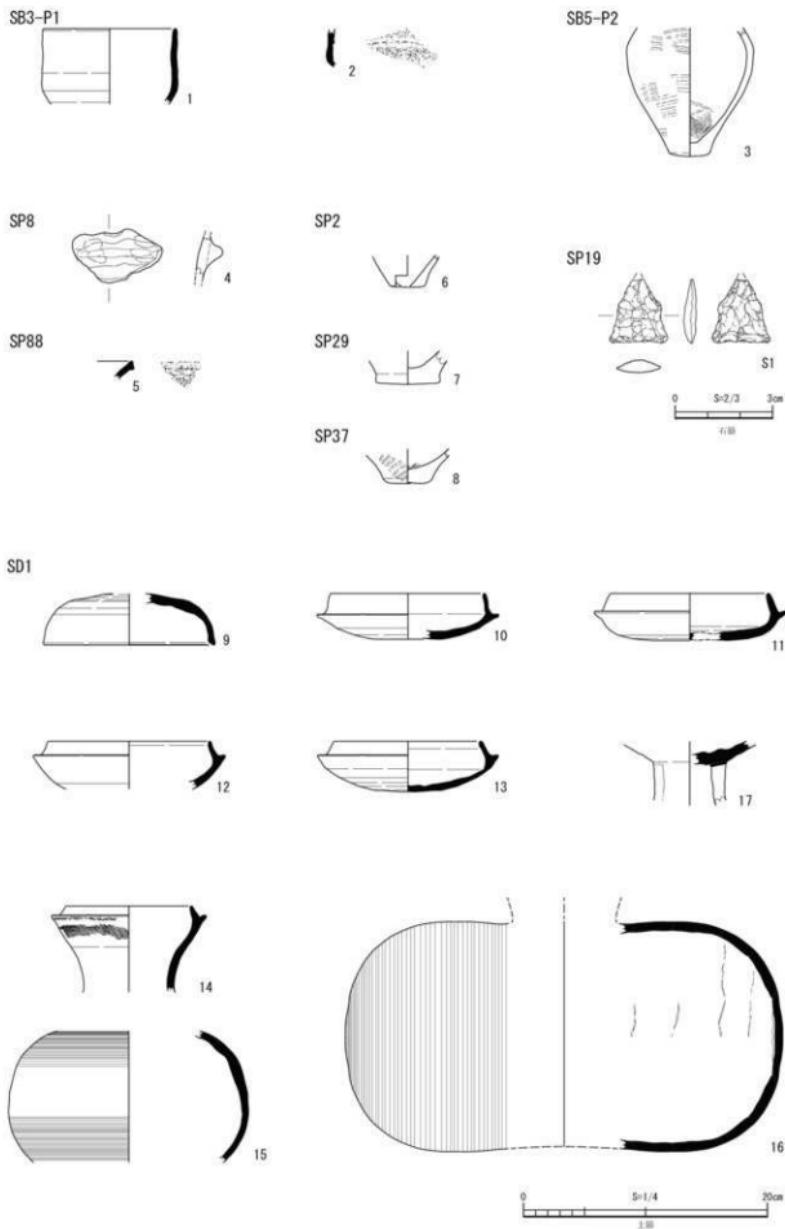


1. 101B5/2 灰黃褐色 シルト質細砂 岩含む

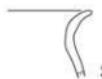
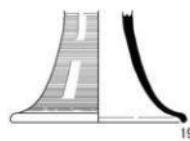
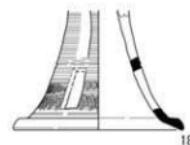
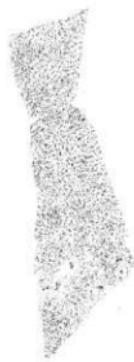
0 2m
S=1/40

溝状造構配置図・溝状造構断面図

図版 10



出土遺物 I



21



22



23



24



25



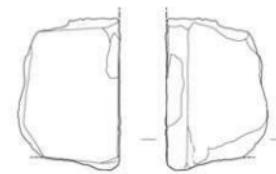
26



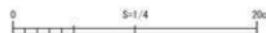
27



28



29



写 真 図 版



H28 調査区全景（西から）



H28 調査区全景（北から）

写真図版 2



H29-2 調査区の立地
(西から)



H29-2 調査区全景
西半部（西から）



H29-2 調査区全景
東半部（西から）



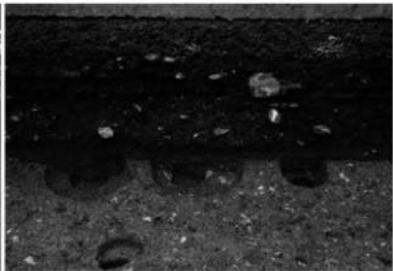
H29-1 調査区西側全景（西から）



H29-1 調査区東側全景（北から）



H28 調査区北壁（南から）



H28 調査区北壁近景（南から）



H28 調査区西側柱穴群全景（北から）



H28 調査区
東側柱穴群全景 (北から)



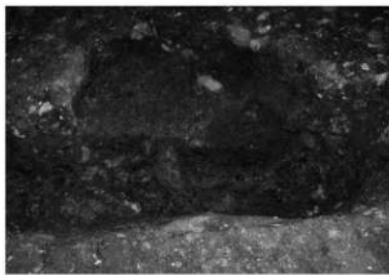
H29-1 調査区
東側柱穴群 (北から)



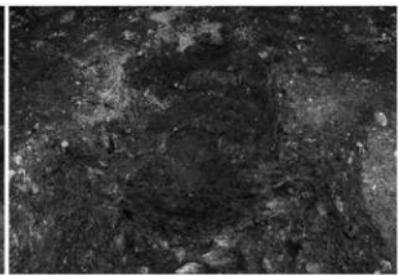
H29-2 調査区
東側柱穴群 (南から)



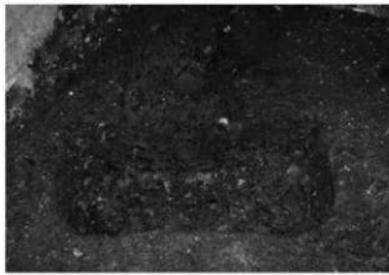
掘立柱建物 SB1 全景（北から）



SB1-P6 土層断面（北から）



SB1-P4 土層断面（北から）



SB1-P10 土層断面（西から）

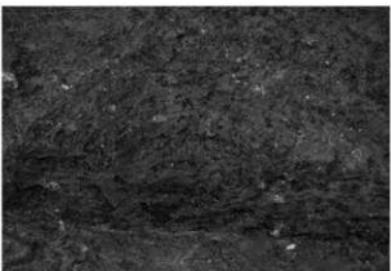


SB1-P11 土層断面（東から）

写真図版 6



掘立柱建物 SB2 全景（北西から）



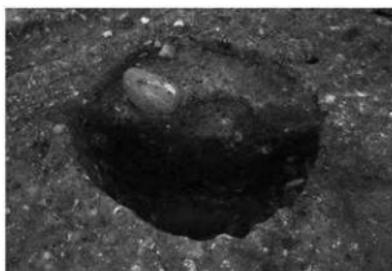
SB2-P5 断ち割り状況（西から）



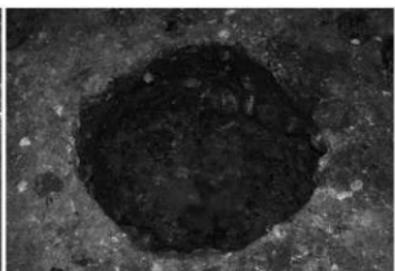
掘立柱建物 SB3 全景（北から）



SB3-P1 検出状況（北から）



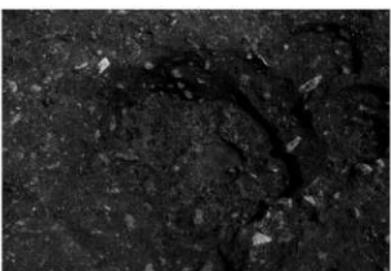
SB3-P1 土層断面（北東から）



SB3-P1 完掘状況（南から）



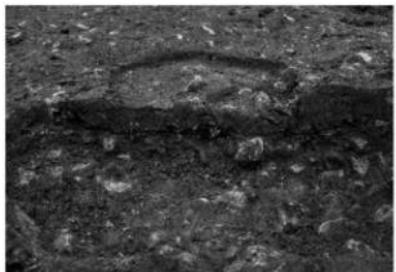
掘立柱建物 SB6-P5 断ち割り状況（南から）



土坑 SK2 検出状況（北西から）



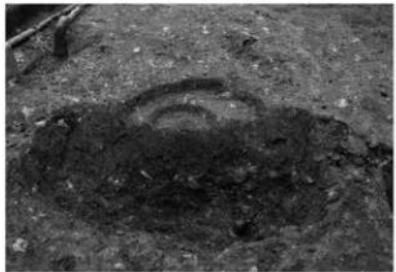
掘立柱建物 SB5 検出状況（南東から）



SB5-P1 土層断面（南から）



SB5-P2 土層断面（南から）



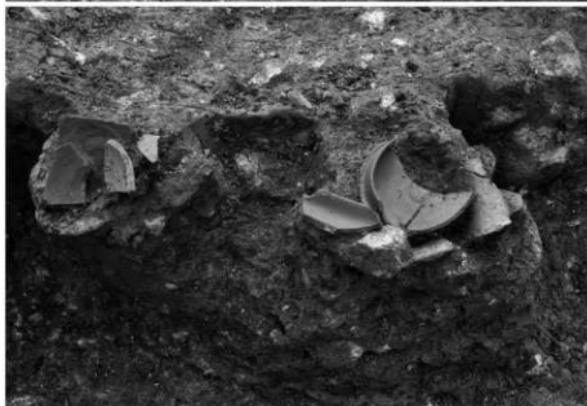
SB5-P3 土層断面（南から）



SB5-P4 土層断面（南から）



溝状遺構 SD1
遺物出土状況（西から）



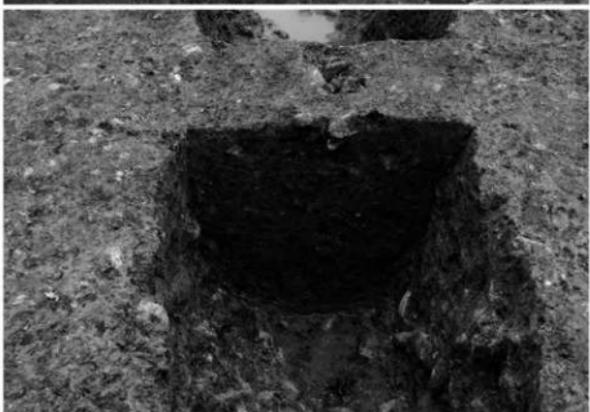
SD1
遺物出土状況（北西から）



SD1
完掘状況全景（北東から）



溝状造構 SD1
完掘状況（南から）



SD1 土層断面 a-a'
(北東から)



SD1 土層断面 b-b'
(北から)



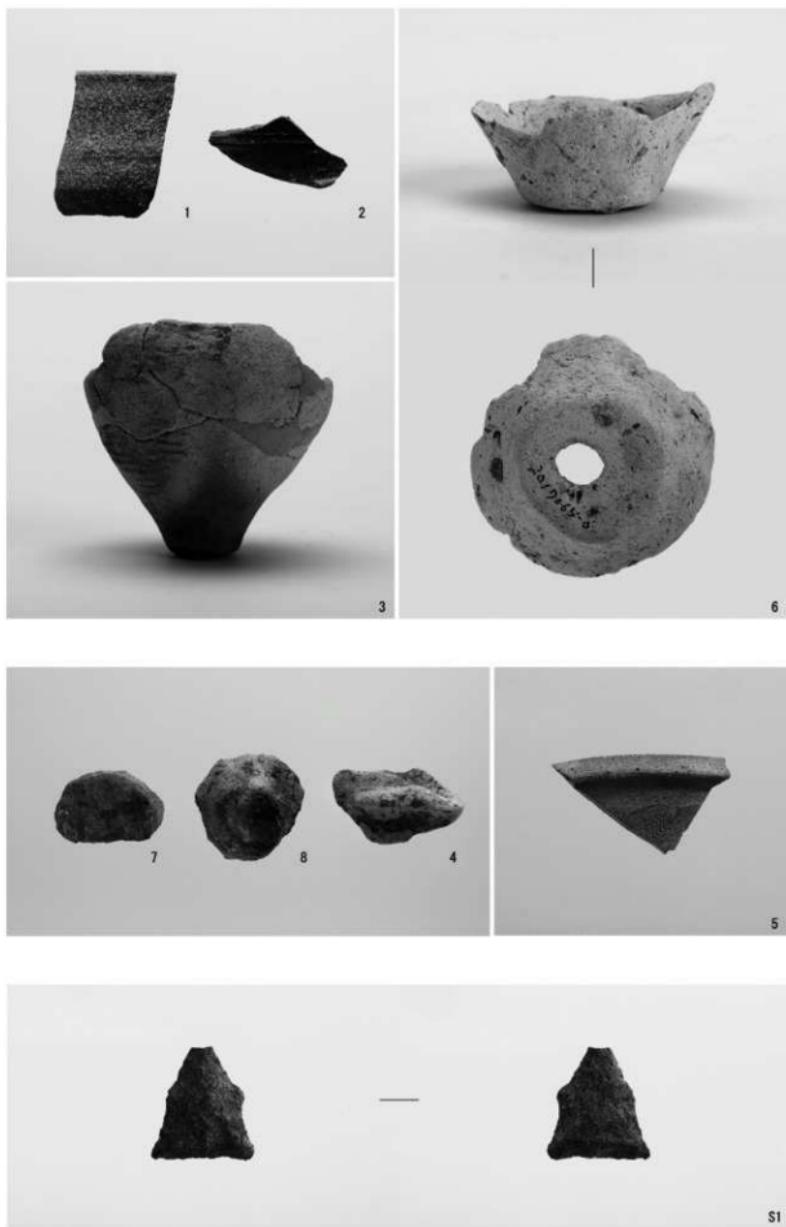
溝状遺構 SD2
完掘状況全景（北東から）



溝状遺構 SD3
完掘状況全景（南西から）



SD3
土層断面（北から）





9



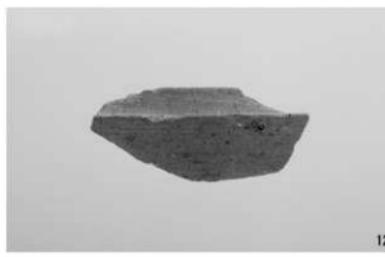
13



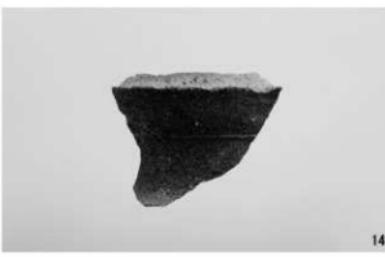
10



11



12



14



15



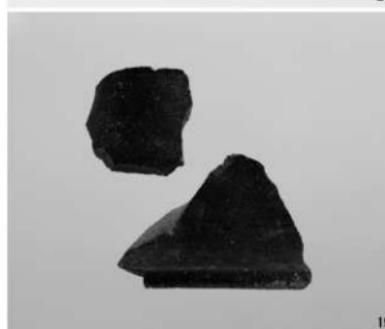
16



17



18



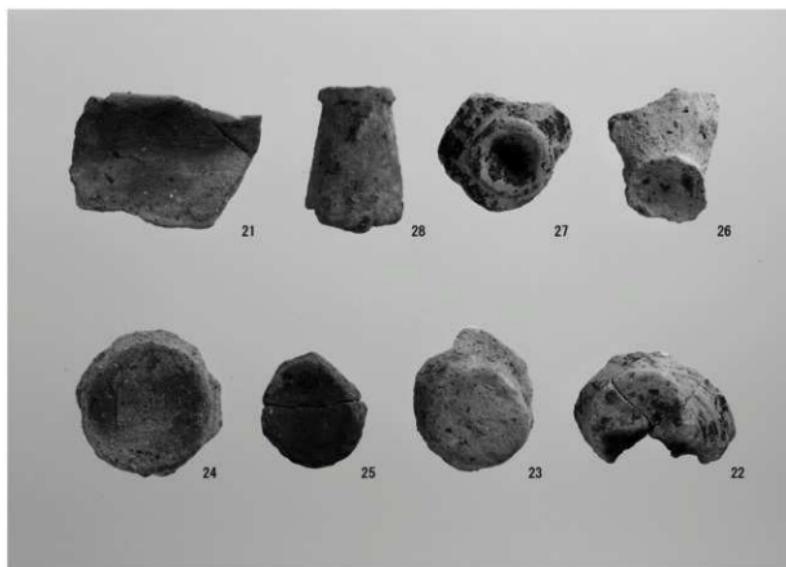
19



20



21



出土遺物IV

報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第510冊

尼崎市

塚口山廻遺跡

—都市計画道路事業(園田西武庫線)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和2(2020)年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：小野高速印刷株式会社

〒670-0933 姫路市平野町62番地
